毎月11日掲載

防災・減災のページ

第99回巡回ワークショップ　@多賀城高

東日本大震災や昨年の台風19号などの体験や教訓を共有し、備えのアイデアを出し合った
＝11月11日、多賀城市の多賀城高

すべきこと 事前に検討

「タイムライン」避難に活用

むすび塾

河北新報社は11月11日、通算99回目の巡回ワークショップ「むすび塾」を多賀城市の多賀城高で開いた。災害科学科の1年生8人が、東日本大震災と昨年10月の台風19号などの体験を踏まえ、風水害の危険が迫った場合の自分と家族の避難行動について専門家と意見を交わした。

豪雨災害への備えを時系列で決めておく予定表「タイムライン」の作成キットを発行した東京法令出版の東北支社長で防災士の杉山克洋さんが助言者を務めた。タイムラインの意義を「風水害は気象情報が出てから災害が発生するまで一定の時間がある。避難先や避難行動を前もって考えることが命を守る行動につながる」と語った。

生徒は事前にハザードマップで浸水深や土砂災害など自宅周辺の災害リスクを調べ、家族と警戒レベルごとに誰が何をするのか、相談をして参加した。下調べで分かったことも。菊地優衣さんは「避難先の第2候補に考えていた施設が、風水害では避難所にならないと知った」と話した。

ハザードマップを使う際の注意点として、杉山さんは「マップは一つの災害想定を基にしている。想定以上の事態も起こり得ると頭に入れてチェックしてほしい」と助言した。

生徒たちは会場でそれぞれのタイムラインを完成させた。避難準備から開始のタイミング、避難完了までの家族の役割や動きを発表。「同居の祖父母は先に避難する必要があるので、早めに持ち物を確認する」「情報収集や家電の操作は、扱いが得意な自分が担当する」などと説明した。

亀山俊斗さんは近くの指定避難所ではなく、神社を避難先に選んだ。「神社は避難所よりも高い場所にある。家族と話し合って決めた」と理由を挙げた。

杉山さんは「避難経路を実際に歩いてみて、課題がないか確認することも大事だ。別の避難先やルートも試して」と求めた。

新型コロナウイルスの影響で、避難所での感染症対策の重要性が高まっている。鶴喰裕貴さんは「避難所に行く前に家族全員が体温を測って健康状態を確認したい」と述べた。

生徒は互いの発表を聞いて被災体験や備えのアイデアを共有した。杉山さんは「自分で考えるだけでなく、家族や仲間と話し合うことで、新たに気付くことがある。作ったタイムラインの見直しを続けて、自分と周りの人の命を守ってほしい」と呼び掛けた。

避難開始のタイミングなどを記し、タイムラインを完成させる生徒たち

監修　減災・復興支援機構　　イラスト　さとうあけみ

災害科学科・16年に誕生　防災の視点で科目再構成

多賀城高災害科学科は、東日本大震災の教訓を次世代に伝え、将来の災害から命と暮らしを守る人材を育成しようと、2016年に開設された。防災系専門学科は阪神大震災被災地の兵庫県舞子高（神戸市）に次いで全国2例目。

定員は各学年40人。生徒は普通科の既存科目を防災の視点で再構成した「自然科学と災害」「実用統計学」など、約30単位の独自科目による理系カリキュラムを履修する。

家庭基礎と保健を組み合わせた1年生の「くらしと安全A」、社会と情報による「社会と災害」は普通科の生徒も履修し、学校全体で災害対応能力の向上に取り組んでいる。

東北大をはじめ各地の研究機関と連携し、専門家を招いた講義やフィールドワークを行う。1年は塩釜市の浦戸諸島、2年は栗原市の栗駒山麓ジオパークなどでの野外実習を通じた課題研究を行って発表。舞子高をはじめ、防災をテーマに国内外との交流も盛んだ。

出身中学は多賀城市内を中心に、仙台市や塩釜市など広範囲にわたる。ほぼ全員が自然科学系学部をはじめとする大学進学を希望する。自衛隊、看護学校に進む生徒もいる。

砂押川で津波の脅威を学ぶ多賀城高生
＝2017年12月8日

■むすび塾に参加して　多賀城高

●車は早く高台へ　東日本大震災では家の車が津波に流され苦労した。失敗を踏まえ、水害が予想されるときは早い段階で車を高台に移動させるのが大事だと考えた。断水で困ったので、水を風呂に張ったりペットボトルに入れたりして備えたい。
＝1年・亀山俊斗さん

●連絡手段を準備　宮城県職員の父は、大規模な災害があると家を離れる。災害時の家族同士の連絡手段を準備したい。最寄りの指定避難所の小学校は仙台駅から近く、震災では多くの人であふれたと聞く。臨機応変に対応できるよう、複数の避難先を考えておきたい。
＝1年・菊地優衣さん

●常用の薬備える　家族全員が薬を常用しているので、避難先で不足しないよう備えたい。新型コロナなどの感染症対策も必要だ。他の人の話で参考になったのは、近所の人へ早めの避難を呼び掛けること。災害時には率先して伝えられるようになりたい。　＝1年・鶴喰裕貴さん

●意見取り入れる　東日本大震災発生時は幼稚園児で、はっきりした記憶はない。自宅が断水し、近所の井戸から水を調達したことは覚えている。災害時には何が起こるか分からない。他の人の意見を取り入れてタイムラインを練り直し、自宅の目立つところに張って水害に備える。
＝1年・新山琴美さん

●携帯の充電大事　震災では情報がなくて非常に困った。情報を確実に入手するため携帯電話を充電し、バッテリーも準備したい。タイムラインでは行動を開始する時間などを決めたが、実際はその通りにいかない場合があることも頭に入れておきたい。　＝1年・菅原楓真さん

●想定外も考える　災害時は正確な情報が生死を分ける。情報が行き届かず、避難が遅れそうな人がいないか、近所に声掛けをしたい。自然災害は想定通りに起こるとは限らない。ハザードマップを参考にしながら、予想外の事態があることも肝に銘じておく。＝1年・玉川碧彩さん

●近所にも声掛け　ハザードマップで浸水の恐れがない場所を調べ、避難先に選んだ。避難する際は近所に呼び掛けたい。状況は急変するかもしれないので、防災情報を小まめに確認するよう気を付ける。準備するほど生存の確率が高くなると感じた。　＝1年・土井一樹さん

●祖母に届けたい　台風が近づいたら、強風で飛ばされて被害が拡大しないように自宅の庭に置いているタイヤやスコップをしまう。減災は事前の準備が大切。今日の体験を生かし、1人暮らしの祖母のためにタイムラインを作成して届けたい。
＝1年・千葉なつきさん

■助言者から

東京法令出版　杉山　克洋さん（50）

緊迫の状況下 道しるべに

自然は私たちに恵みをもたらす一方、脅威にもなる。いざという時に正しく行動し、自分や家族、友人の命を助けるには、事前の準備が必要。タイムラインの作成は、地域のリスクを理解し、緊迫した状況下で行動する道しるべとなる。

まずは自分でタイムラインを考え、仲間や家庭に伝えて話し合おう。新たに気付くことがあるはずだ。そして頻繁に見直すこと。自然は想定を超える可能性もある。脅威をやり過ごし、大切な人の命を守る。今回、話し合ったり考えたりしたことを日々の学習や生活に役立ててほしい。

東日本大震災をはじめとする自然災害の被災体験を振り返り、防災の教訓や課題を考えてみませんか。町内会や学校、職場など少人数の集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022（211）1591。